

動的家族画 (KFD) の「様式」について

——臨床群の特徴——

市川 緑

I. はじめに

動的家族画 (KFD) は, Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972) が考案したもので, 「投影法の世界の輝ける星」と呼ばれ, 数多くの臨床家が利用してきた。わが国においても, 加藤ら (1975) が翻訳紹介して以来広く臨床現場において使用され, バウムテストとならんでなくてはならない描画診断法となっている。その特徴は, 「家族みんなが何かしているところ」を描いてもらうことで, 描き手が知的あるいは形式的な家族理解から解き放たれ, 個性的な自由な表現が可能になることである。

描画の「様式」とは, 誰が, 何をしているところか, どんな大きさで, どの位置に描かれたかということ以外に, Burns, R. C. が着目した絵の特徴で, たとえば, ある人物がぐるりと周囲を囲まれていたり, ある人物の下部に線が引かれていたりするものである。Burns, R. C. は1万枚もの絵について検討し, 7項目を挙げてその意味を説明解釈したが, 「孤立している」「非常に強いストレスや不安定さがある」など, かなり強い否定的コメントである。わが国で動的家族画について詳細な研究を報告した日比 (1986) もそれに習って集めたデータを検討しているが, 一般児童青年群と臨床群の比較において, 統計的有意差は認められなかった。(人物下線は, 臨床群が, 普通群の約3倍出現しているので, データ数が増えれば, 有意差が出る可能性もありそうだが。)

筆者は1998~2003年の間, 市立病院小児科で心理相談のインタビュー面接時に動的家族画を実施していたが, その印象でも特別の「様式」が認められることはさほど多くなかった。Burns, R. C. や日比の報告と比べることで, 日米の文化差なのか, 近年の変化なのか, 2004年の一般小学生のデータも含めて比較検討し, 報告したい。

II. 方法

一般群については, 市川 (2005) において報告したデータを用いる。但し, 「様式」については検討していないので, 今回新たに分析する。

大阪府下F小学校児童45名, O小学校児童128名, 計173名

内訳 低学年 男子 59名, 女子 55名

高学年 男子 35名, 女子 24名

臨床群

- 1) 調査対象：兵庫県下K市立病院小児科心理相談室を訪れた小学生41名
 内訳 低学年 男子 7名, 女子 16名
 高学年 男子 10名, 女子 8名
- 2) 調査期日：1998～2003年 心理相談のインタビュー面接時
- 3) 調査用具：A4の普通紙, Bまたは2Bの鉛筆, 消しゴム
- 4) 教示等：教示は次のように行った。「あなたを含めて, あなたの家族みんなが何かしているところを絵に描いてください。棒のような人は描かないでください。立っているところではなく何かしているところを描いてください。」描き終えてから, 描いた順に絵に番号をつけ, それが誰で, 何をしているところか尋ねて, 裏に記入した。個別に実施。
- 5) 検査者：筆者または同僚の臨床心理士
- 6) 描画後の質問：描かれなかったメンバーがいるかどうかなど, 個別実施の利点を生かし積極的に質問した。
- 7) 分析：Burns, R. C. の7項目について分析した。さらに, 描かれたメンバーの行為, 相互交流についても調べた。

Ⅲ. 結果と考察

A. 「様式」について

まず, メンバー全員に対するものとして, 区分, 折り紙区分, 上部の線, 下部の線, 辺縁位の5項目, 個別のメンバーに対するものとして包囲, 人物下線, 辺縁位の3項目を分析する。表1と表2にそれぞれの「様式」を用いた人数と割合を示す。

- 1) 区分：区分とは, 漫画のコマ割りのように用紙をあらかじめいくつか分割し, そこに家族メンバーを描くもので, 「社会的に孤立した児童や引っ込み思案の児童の描画に多く見られる(日比, 1986)」 「コミュニケーションの無さを表す(加藤, 1986)」と言われている。すなわち, 家族メンバーを孤立させ, 感情的交流を避けている状況と考え

表1 全体にかかわる「様式」の出現率

群	区分		上部の線		下部の線		辺縁位	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (41人)	1	2.4	0	0	4	9.8	0	0
一般群 (173人)	12	7.0	4	2.3	13	7.5	5	2.9

表2 いずれかの人物に「様式」が出現した割合

群	包囲		人物下線		辺縁位	
	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (41人)	5	12.2	4	9.8	1	2.4
一般群 (173人)	45	26.0	53	30.6	7	4.0

*

*

* 5%レベルで有意差あり

図1 「区分」の一例 (高学年女子)

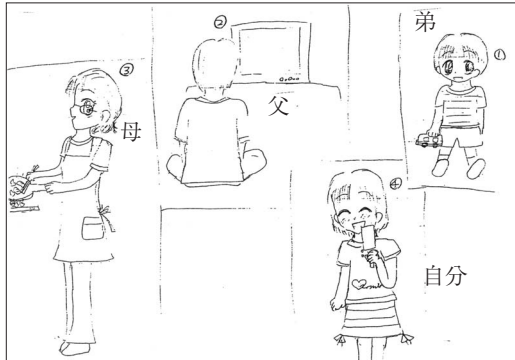


図2 「上部の線」の一例 (高学年男子)



られる。図1に「区分」の一例を示す。(プライバシー保護のため、例は一般群の中から選んだ。以下の図も同様である。)表1を見ると割合は一般群7.0%、臨床群2.4%であるが、有意差は認められない。臨床群に多く現れる特徴とは言えない。日比の資料では、普通群16.7%、臨床群15.3%、Burns, R. C.では、13.0%であるから今回の出現率はどちらの群においてもかなり低いといえる。細かく見ると、低学年ではほとんど出現しておらず、高学年でみとめられるので思春期特有の家族と距離を置く傾向が現れていると言えよう。そしてその傾向は近年薄らいでいるのかもしれない。

- 2) 折り紙区分：折り紙区分とは用紙を折りたたんで分割の区切り線とするもので、区分の極端な様式とされる。「強い不安や恐れを持った子どもの特徴」(Burns, R. C., 1972)とされるが、一般群、臨床群ともまったく出現しなかった。Burns, R. C.や日比においても数%であるから特に考察を加えることは難しい。
- 3) 上部の線：用紙の上部全体に線が引かれたもので、暗雲が広がるかのように「世界全体が不安と恐れに満ちたものと感じられる場合」があると日比(1986)は説明している(図2参照)。表1に示したように臨床群では認められず、一般群でも出現率は低い。先行研究でも同様である。
- 4) 下部の線：用紙の下部全体に線が引かれたもので、「不安定感を解消するため」(日比, 1986)のしっかりした土台である(図3参照)。その厚みや強調度が、不安定感の強さと関係する。厚みのない1本の線もカウントしたためか、日比(1986)の報告(臨床群、普通群とも4.7%)より高い数字になっている。ちなみにBurns, R. C.(1972)では12.0%である。細かく見ると、低学年で多く出現しており、安定した基礎を求める気持ちが強いと推測できる。しかし、臨床群において特に不安定感が強いとはいえない。
- 5) 辺縁位(全メンバー)：用紙の端に沿って、家族メンバーを描く描き方で、ここでは家族メンバー全員をこの様式で描いたもののみをカウントした。(個々のメンバーを辺縁位で描いたものについては後述する。)これは、防衛的態度の表れとみなされてきたが、防衛的になっても当然と思われる臨床群ではまったく出現しておらず、仮説の見直しが必要ではないかと思われる(図4参照)。

図3 「下部の線」の一例（低学年男子）

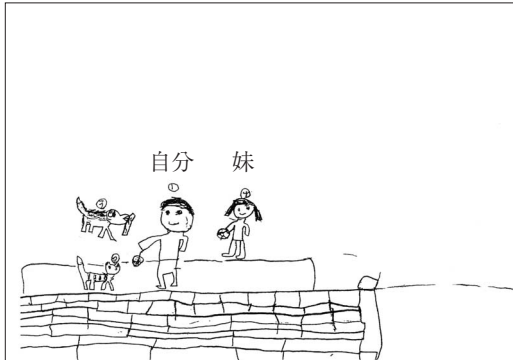


図4 「辺縁位(全員)」の一例（低学年女子）

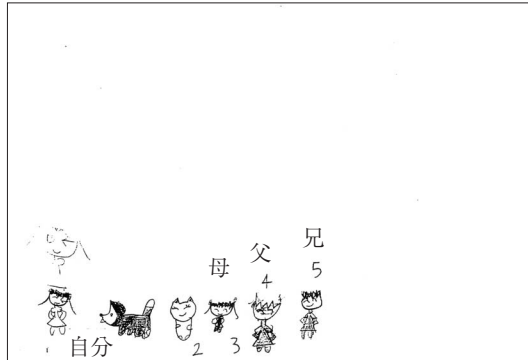


図5 「包囲」の一例（高学年男子）



- 6) 包囲：包囲とは、一人あるいは複数の人物を囲って、カプセルに入れてしまうことで、「開放的な感情的態度を持ち得ない時」（日比，1986）心理的な壁を作っていると考えられる。加藤（1986）は、「不安や恐れを抱く人物を隔離したい欲求」をあらわすと述べている。縄跳び，自動車などを使って巧みに包囲する場合も多い（図5参照）。いずれかの人物（複数の場合も含む）の身体のおよそ2分の1以上が囲まれている絵をカウントしたが，判断に迷うものも多くあった。一般群26.0%臨床群12.2%で有意差が認められた（表2参照）。日比（1986）では，普通群，臨床群とも60%を超えており，カウントの基準を明確にする必要があると思われる（Burns, R. C. では13.0%）。今回一般群のほうが，感情的に開放的でないという結果で，予想とは逆である。臨床群で「包囲」の例を見ると，父母を囲ったものではなく，自分や同胞に対して「包囲」している。3例づつと少ないのでははっきりとは言えないが，いずれも楽しそうな絵で，「包囲」することには自分を守るというプラスの意味もあるのかもしれない。寺嶋ら（1996）も，縄跳びで包囲されたものと，布団で包囲されたものを例に挙げ，絵から受ける印象がまったく異なることから，すべての「包囲」を同じ意味合いで解釈することへの疑問を呈している。
- 7) 人物下線：特定のメンバーに対してのみ不安感の強い場合に，その人物像の下に線を

図7 「辺縁位（特定人物）」の一例（高学年男子）



図6 「人物下線」の一例（低学年女子）



引くというものである（図6参照）。座布団に座っているようなものもカウントしたためか、一般群（1986）の出現率は30.6%となった。表3に示したように臨床群は9.8%で（有意差あり）、日比の結果（普通群8.5%臨床群23.5%）とまったく逆転している。私見であるが、不安感が強いというようなマイナスの意味だけでなく、特に関心があったり、気になっていたりする時もその人物に下線を引くのではないだろうか？いずれにせよ、人物下線が、臨床群に多く出現するとは言えない。

- 8) 辺縁位（特定メンバー）：特定の家族メンバーのみを用紙の端から描いたものをカウントした。Burns, R. C. (1972) では、全メンバーを辺縁位で描いたもののみをカウントしたと思われ（6.3%）、日比（1986）では、全メンバーのものも特定メンバーのものもまとめてカウントしているため（臨床群20.0%、普通群18.4%）、単純に比較することができないが、表2を見ると、臨床群2.4%一般群4.0%でBurns, R. C. の値に近い。5)の値と合わせても日比の報告の半分ほどの値である。特定のメンバーのみを辺縁位で描いた場合、全員を辺縁位で描く場合とその意味は異なると思われる。つまり、特定のメンバーのみを辺縁位で描いた場合、単なる防衛的態度の表れではなく、辺縁位で描かれた人物への特別の感情（心理的に遠ざけておきたいというような）があると考えられるからである（図7参照）。ここでも臨床群が一般群よりも多く辺縁位を用いているとは言えない。

以上より、「様式」については、臨床事例に特に多く出現するとは言えない。むしろ、臨床群のほうが様式の出現率は少ない傾向にあった。このことは、「様式」についての分析は個々の事例を分析する際には、手がかりとして有用であるかもしれないが、それが出現しているかないかで、問題があるかないとか、深いとか浅いとかは言えないのではないと思われる。ただし臨床群の人数が十分に大きくないので、さらにデータを増やして分析する必要がある。また、描画の実施状況が、臨床群と一般群では異なったので、それが影響を与えているかもしれない。つまり、臨床群では、日ごろ親しみのない病院の一室で、検査者と1対1で実施したため、緊張感やよりよく見せたい気持ちが働いたかもし

表3-1 父親像にかかわる「様式」の出現率

群	包囲		人物下線		辺縁位		いずれか1つ以上	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (38人)	0	0	2	5.3	0	0	2	5.3
一般群 (152人)	19	12.5	13	8.6	5	3.3	37	24.3

** 1%レベルで有意差あり

表3-2 母親像にかかわる「様式」の出現率

群	包囲		人物下線		辺縁位		いずれか1つ以上	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (40人)	0	0	1	2.5	0	0	1	2.5
一般群 (159人)	21	13.2	20	12.6	2	1.3	43	27.0

** 1%レベルで有意差あり

表3-3 自己像にかかわる「様式」の出現率

群	包囲		人物下線		辺縁位		いずれか1つ以上	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (40人)	3	7.5	3	7.5	0	0	6	15.0
一般群 (166人)	18	10.8	18	10.8	3	1.8	39	23.5

表3-4 同胞像にかかわる「様式」の出現率

群	包囲		人物下線		辺縁位		いずれか1つ以上	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
臨床群 (26人)	3	11.5	2	7.7	0	0	5	19.2
一般群 (140人)	19	13.6	26	18.6	2	1.4	47	33.6

れないし、一般群では、いつも通っている学校の一室で集団で実施されたため、リラックスして率直な表現となった可能性がある。

ここまで、「様式」の種類ごとに考察してきたが、「様式」が用いられた人物ごとに見ると何か傾向があるだろうか？表3-1, 3-2, 3-3, 3-4より、父親像と母親像に関しては、何らかの「様式」が用いられた割合に差のあることがわかる。臨床群は、一般群よりも「様式」を用いた割合が少ない。よい意味でも悪い意味でも臨床群のほうが父親母親への関心が低い、関係性が薄いと考えるはどうだろうか。

これまで、「様式」は、「何かことが起きて、愛情が素直に表現されない時 (Burns, R. C., 1972)」用いられるとされてきたが、「一般群のほうが臨床群よりも素直に愛情表現をしない」とは考えにくい。今回の結果は従来の解釈ではうまく説明できない。「様式」の解釈仮説は、30年を経て、もう少し広く柔軟に考えなおす時期に来ているかもしれない。

B. 相互交流について

次に、描かれたメンバーの相互交流について検討する。絵に描かれた状況が、複数の人物の交流を示しているものをカウントした。複数の人物が同じ行為をしている場合に加え、

表4 人物像の相互交流の有無

群	相互交流あり		相互交流なし	
	人数	%	人数	%
臨床群 (41人)	25	61.0	16	39.0
一般群 (173人)	80	46.2	93	53.8

10%レベルで傾向あり

たとえば、「父：ボールを投げている」、「自分：打とうとしている」のように、行為自体は違っても一緒に行動していることが明らかな場合もカウントした。結果は表4に示す。5%レベルでの有意差は認められなかったが、臨床群のほうが、相互交流が多いという傾向は認められた（10%レベル）。これも意外な結果である。細かく見てみると、臨床群においては、家族全員での交流がその大半を占めている（25人中20人）のに対し、一般群では、約半数でしかない（80人中43人）。臨床群では、それぞれの人物の行動をじっくり考えずに、とりあえず、一緒に何かしているところにしてしまおうというような、若干投げやりな考えがあったのかもしれない。棒人間ではないが、それに近い単純な形態の人物像を描いた割合が、臨床群で多かったこともこの考えを裏づける（表5と図8参照）。また、一般群の低学年男子に相互交流場面を描いた割合が高いのは心理的幼さがまだ残っていて、家族と密着している部分が、他の群よりも大きいのであろうと推測できる。

表5 単純化された人物像

群	単純化されている		普通に描かれている	
	人数	%	人数	%
臨床群 (41人)	7	17.1	34	82.9
一般群 (173人)	12	6.9	161	93.1

5%レベルで有意差あり

図8 単純化された人物像の一例（低学年男子）



C. 人物像の行為について

臨床群の行為について描かれた人物ごとにまとめたものが表6-1, 6-2, 6-3で

表6-1 父親像の行為

順位	行為	臨床群 (37人)		一般群 (152人)	
		人数	%	%	順位
1	遊んでいる	6	16.2	12.5	2
2	食事をしている	4	10.8	9.8	4
2	仕事をしている	4	10.8	15.8	1
4	スポーツをしている	3	8.1	3.3	8
8	テレビを見ている	1	2.7	11.8	3

表6-2 母親像の行為

順位	行為	臨床群 (40人)		一般群 (159人)	
		人数	%	%	順位
1	遊んでいる	7	17.5	9.4	2
1	料理している	7	17.5	26.4	1
3	食事をしている	4	10.0	6.3	3
4	立っている, 座っている	3	7.5	4.4	5
4	話をしている	3	7.5		*

*10位以内に入っていない

表6-3 自己像の行為

順位	行為	臨床群 (40人)		一般群 (166人)	
		人数	%	%	順位
1	遊んでいる	13	32.5	27.1	1
2	趣味の何かをしている	4	10.0	5.4	6
3	食事をしている	3	7.5	10.2	2
3	テレビを見ている	3	7.5	6.6	3
3	勉強している	3	7.5	6.6	3

ある。ある人物像が描かれなかった場合もあるので、総数は異なる。一般群の行為については、すでに報告した(市川, 2005)が、比較しやすいように表に付け加えた。全体としては、臨床群も一般群もよく似ているといえる。細かい点では、臨床群の特徴は、父親の行為として、「テレビを見ている」のが少ないことである。リラックスし、休息している父親像が少ないのは、日比(1986)の報告と一致するが、日比では、「仕事をしている」と「自動車に乗っている」が1位2位を占め、社会人としての父を認知しており、心理的距離が遠いと分析された。今回の結果は、「遊んでいる」「食事をしている」が1位2位で、家族との交流を示すものである。したがって、心理的距離が遠いとは言えない。現代の臨床群の特徴かもしれないが、さらにデータを増やして検討する必要がある。

IV. まとめ

動的家族画の、主として「様式」について臨床群と一般群を比較し、先行研究の結果とも比べた。解釈仮説や、先行研究から予想されたものとは異なり、臨床群と一般群は差がないか、ある場合には、臨床群のほうが「様式」の出現率は低かった。それについて検討を加えたが、説明のつきにくい部分もあり、さらにデータを増やして詳細な分析をするべきと考える。今回の結果より、「様式」には、これまで考えられていたように自由な感情

の交流が妨げられているといったマイナスの要素だけでなく、少し身を引いて自分を守るというような、プラスの要素があるのではないかと推測された。

本来、描画テストは、個別の事例について、描かれた絵から手がかりを得て、描き手自身やその家族について理解を深めるためのものであり、量的な分析にはなじみにくい側面もあるかもしれない。

<引用・参考文献>

- 市川 緑（2005）動的家族画の分析——小学生の家族イメージについて——大阪経大論集第56巻第1号 p93～100
- 江幡綾子・吉田昭久（2000）子どもの絵に見られる家庭内コミュニケーションの実態と心理的課題——動的家族画テスト（KFD）を通して——茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）49号 p95～115
- 加藤孝正（1986）動的家族画（KFD）臨床描画研究Ⅰ p87～104
- 小村チエ子（1995）子どもの絵からのメッセージ 朱鷺書房
- 高橋正泰・大野博之（2003）動的家族画テストに見られる母親の描画特徴と心理特性——母子関係アセスメントとしての有効性の検討——九州大学心理学研究第4巻 p279～285
- 寺島繁典ら（1996）家族画テストにおける一般児童の特徴 関西大学社会学部紀要 第28巻1号 p81～109
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972) Actions, styles and symbols in Kinetic Family Drawings
加藤孝正ら訳（1975, 1998復刊）子どもの家族画診断 黎明書房
- 日比裕泰（1986）動的家族描画法（K-F-D）——家族画による人格理解——ナカニシヤ出版